

教科横断的な体育における学びについての事例的検討

－「主体的・対話的で深い学び」の視点を参考にして－

尾関里都 （ 愛知教育大学 ）

1. 目的

本研究の目的は、小学校4年生の教科横断的な授業実践から、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点を参考にした体育における子どもの学びの事例的な検討をすることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者 N市立小学校4年生36名
- 2) 実践概要 ESD教育を目指す名古屋市環境局・大学・公立学校の共同的な取組で、海洋汚染とウミガメをテーマにした教科横断的な実践（国語科・校外学習・体育科の全5回）。
- 3) 分析方法 授業を参与観察し、授業記録や子どもの感想文を基にしたフィールドノートからエピソード記述¹⁾を参考にしてエピソードを作成し、子どもの学びを検討した。

3. 結果と考察

表1は、エピソードと子どもの学びを整理したものである。

表1 エピソードと子どもの学び

エピソード	エピソードの内容	子どもの学び
1	「アクション」から「リアクション」へ	感受する
2	「自分との対話」から「ウミガメとの対話」へ	身をもって知る
3	「なりきる」から「なる」へ	相手の身になる
4	「一人」から「みんな」へ	心と体を一体として捉える
5	「他人事」から「自分事」へ	問題の所有感
6	「それ」から「同じ生きもの」へ	他者の尊重
7	「教える存在」から「共に考え創る存在」へ	学びを支える教師の姿

エピソード1~4では、相手の身になること（発信）と身をもって知ること（受信）を相互に繰り返し、学びの対象と対話したと考える。身体の話では、次第に自分と他者が重なっていき、一体となる。これは体育の「対話的な学び」と考える（図1）。

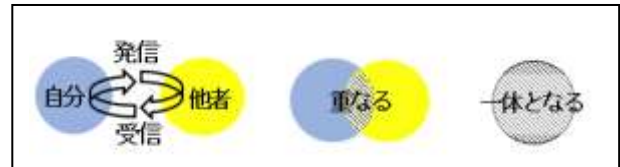


図1 体育の「対話的な学び」

エピソード5・6では、問題を自分事としてとらえる所有感と他者の尊重がある。所有感は「主体的な学び」の始まりであり、自己の活動を振り返り、未来を創造する姿は、過去・今・未来が時間を超えてつながる「深い学び」と解釈ができる。他者の尊重は、教科横断的な本実践で目指すESD教育の理念にも沿うといえる。このことから、体育の「主体的・対話的で深い学び」は教科の枠を超えて他の分野にもつながるものであるといえる。これらの学びは、教師の「共に考え創る存在」が支えていたと考える。

4. 結論

本研究では、小学校4年生の教科横断的な授業実践から、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点を参考にした体育における子どもの学びの事例的な検討を目的とした。本実践における体育の学びには、自他の心と体を一体として捉えることになる「対話的な学び」と、問題の所有感になる「主体的な学び」、過去・今・未来がつながる「深い学び」があり、さらにはそれらの学びを支える共に未来を創る仲間としての教師の存在があったと考える。

なお、本研究は一つの実践を解釈したものにとすぎず、体育の学びについては検討の精度を上げるとともに、終わりのない検討が必要である。今後も実践を重ね、子どもの学びの事実から、体育の学びとその可能性について検討し続けたい。そして、子どもの学びに寄り添い、一番近い場所で子どもの学びを支えられるよう努力し続けたい。今後の課題とする。

5. 主な参考文献

鯨岡峻（2005）エピソード記述入門，東京大学出版会。